

ある社長の一夜 One Night

藤田雅史

社長、お先に失礼します。半分開けたドアから疲れのにじんだ顔を覗かせ、営業部長の笹岡が小さく頭を下げる。

「明日の定例会議、予定通り九時開始でよろしいですか？」

「うん、問題ないよ」

「午後イチに変更しても構いませんけど」

「いや、気をつかってくれなくていい。それに午後はアポが入ってる。遅くまでおつかれさん」

静かにドアが閉められ、足音が遠ざかると、スイッチの軽い音がして、ドアの隙間から漏れる明かりの線が消えた。

新入社員のときからこの部屋の壁にかかっている古い時計を見上げると、深夜一時を少しまわったところ。こんな時間まで会社に残っているのはもう俺ひとりだ。

ひとりになって気が緩んだのか、一度大きく息を吐くと、全身から力が抜けていく。自然と背中が丸くなり、あごが上がる。

社長室とはいえ、使っているのは他の社員と同様のスチール製デスクに、激安通販でまとめて仕入れたワークチェアだ。面積の小さな薄いクッションの背もたれでは、新人のときから三〇キロも増量した今の俺の体重を支えきれるか心許ない。

デスクのノートパソコンの画面にはエクセルのシートが表示されているが、少し離れると、視界が霞んでうまく文字にピントを合わせられない。こめかみをぎゅつとつまむ。ああー、と無意識のうちに息が漏れる。疲れている。

眼科から処方された目薬を両目に一滴ずつ落として、俺は応接用のソファに横になった。時代に取り残されたような豪華な本革

のソファセットは、シンプルに片付いた部屋の中でやけに浮いている。これも先々代のときからの、つまりはいい時代だった頃の、バブルの遺物だ。ところどころの傷は目立つが、処分するにしているのが良すぎる。

女子社員や若い連中からは、ダサイとか、やくぎの事務所みただとか不評だが、見た目の良し悪しだけで物を捨てるなど、俺たちの育った時代からは考えられない。

「百万くらいしたんじゃないか、このセット」

「えー、まじですか」

「バブルときに先々代が買ったんだ。セミナー仕切ってたイベントの実家が家具屋でな。付き合いだよ」

「へえ」

バブル、という言葉の感覚が、今の若い社員には通じないらしい。聞けば平成生まれなのだから当然といえば当然だ。

俺だって太平洋戦争の話をされてもピンとこないし、戦後の物のない時代を経験しているようで、実体験としての記憶は実のところあまりない。幼い思い出といえば、東京オリンピックあたり  
の記憶からはじまる。

偉そうなことを言っても、俺の知る貧しさなんてたかが知れている。ソファを処分できないのはただの貧乏性であって、さらに言うなら、俺にインテリアのセンスやこだわりがないだけの話だ。

さて、そろそろ俺も帰るか。

頭ではそう思っているのだが、ソファのクッションに深く沈み込んだまま、身体はぴくりとも動かない。

この何年か資金のやりくりに奔走してばかりで、疲れきった肉体は還暦を前にもう根を上げようとしている。

いや、このままでは、身体よりも先に精神の方がまいってしまいかもしれない。いくら手を尽くしても赤字は減らない。売上は年々、着実に減少している。

ポン、とデスクから間の抜けた電子音が聞こえ、俺はようやくそれを合図にしてむつくりと起き上がり、デスクに戻った。

マウスを動かし、パソコンの画面をスクリーンセーバーから元に戻す。エクセルを閉じて、メールソフトを立ち上げる。

メールは人事部長の澤村からだった。あいつもこんな時間まで下の階で仕事をしているのか。

メールには、新卒採用の最終面接報告書が添付されている。

一昨年に寿退社した営業の欠員を補充するために、今年是一名だけ募集した。最終面接で四名に選ばれたと聞いている。

本来なら俺が面接官の椅子に座り、ひとりずつ慎重に見極めたところだが、あいにく都合がつかなかった。

明日朝の定例会議で、澤村から直接説明を受ける。その資料を、事前に寄越したようだ。

新卒採用か。

俺は独りごちてノートパソコンを持ち上げ、マウスのコードに気をつけながら、応接ソファのテーブルまでそれを運んだ。

ノートパソコンが軽量化したおかげで、出張先でも自宅でも、どこにでも自由に持ち運べるようになったのは仕事上確かに都合がいいのだが、そのせいで肩と腰の負担は増し、目は慢性的にひどく疲れ、どこに行ってもバッテリーの残量が心配で気分が落ち着かない。

社長というのはもったいなく、重厚な椅子にどかっと腰掛けて動かない山のようなイメーজだったが（実際に先々代はそうだったが）、今、俺がそんなことをしては、たちまち会社が立ちゆかなくなってしまう。

代表取締役社長の肩書きなど、ただ名刺に印刷する記号に過ぎないとも思う。パソコンとネットワークとその速度に翻弄されて生きる姿は、肩書きのない若い営業社員たちとなんら変わらず、むしろ年齢を重ねた分だけ、人の目にはみじめに映っているのだろう。

ネクタイを外して再びソファに横になると、またスクリーンセーバーがくねくねと動き出した。見るたびに不愉快な気持ちになるのだが、それももう慣れっこになった。

「設定変えればいいじゃないですか。かんたんつすよ」

若い総務の社員に言われたばかりだが、そのかんたんなことが面倒くさい。それにたとえ不快なことであっても、日常の景色を変えることに、いささか抵抗がある。歳をとったせいか、些細なことでも変化を恐れるようになった。

今の社員に毎月給料を払うのもやつとだつていうのに、新卒採用かよ。どこにそんな余裕あるんだよ。自分が決めたことに、今さら文句をつけてみる。

俺たちが入社したのは、もう四十年近くも前だ。あのときは同期入社が十人もいた。高度成長は一段落していたが、時代はまだまだ上を向いていた。

たしか、入社してから一日も欠かさず読み続けていた朝刊に、「もうすでに物質的に豊かになったと実感する国民の割合が、まだまだ物質的に豊かではないと考える国民のそれを上回る」という世論調査の結果が載っていた。なぜだかよく覚えていない。

だからこれからは、物質の豊かさではなく、精神の豊かさが求められる。学業に励み知識を得て、世界を広げる。そのために、子どもたちに質の良い学びを。よりレベルの高い学習環境を。偏差値の高い大学を。先々代の社長のだみ声が目によみがえる。

俺たちの会社は、学習参考書をずっと売り物にしていた。

まだ「少子化」など問題ではなかった時代だ。たくさんの子どもたちが、少しでもよい高校に入ろう、偏差値の高い大学に入ろうと必死になっていた。学年、教科、レベル、進路に合わせて参考書を星の数ほどつくり、あらゆる方法で販売した。

当時はまだ新しかった、チラシやラジオショッピングでの通信販売をはじめ、学習塾との提携を強化し、それこそばらまくように売りさばいた。家庭教師の斡旋もはじめた。受験生を抱える親

に向けたセミナーを開き、心得を説いた本も売った。くだらない内容だったが、意外なほど売れた。

当時は働けば働くほど、面白いように業績が伸びた。

俺たちは会社が好きだった。仕事が生き甲斐だった。働いて、出世する。それが俺たちの人生だった。そのことを疑う理由などひとつもなかった。

しかし、時代は変わった。同期の仲間たちは、バブルがはじけてからリーマン・ショックまでの約二十年の間に、示し合わせたように次々と会社から去っていった。

昔と同じように仕事を続けても、会社の将来に期待が持てないのは明らかだった。子どもが減り続ける時代だった。需要と供給のバランスが大きく崩れ、業界全体が自然淘汰の道を歩み出した。そうなれば、実績も情報量も豊富な全国大手に太刀打ちできるはずがない。

ペーパーレスの風潮も重なり、そのくせ紙代と印刷コストは上がって、毎年赤字がかさんでいく。社内は経費削減が徹底され、削ってはいけないコストまで削られる。そうすると、サービスの品質が落ちる。会社は、当たり前前の負のスパイラルに陥った。

八年前、先々代から先代への社長の交代を機に、いずれ社内で大規模なリストラが敢行されるという噂が広がった。確かに年功序列の給与制度ほど、経費削減の方針に相容れないものはない。

同期の仲間は、俺と、もうひとり、編集の岩瀬だけだった。社員の数良かった時代の半分まで減っていた。そのとき手を挙げたければと今になって思うことはある。でも、当時の俺にそんな選択肢はなかった。むしろ逆に、俺が会社をなんとかしなくては、と思っていた。

翌年、俺は先代の新社長に引き上げられて、副社長に抜擢された。先代は同じ営業畑の人間で、俺が若い頃から世話になっている直属の上司だったから、俺が声をかけられるのは、社内的には納得の人事だったろうと思う。

ところが、かわりに同い年の岩瀬の首が切られた。

あれは、岩瀬のもとに異動の内示が届いた日の夜のことだ。五十を過ぎてからの地方の営業所、それも閉鎖が検討されている営業所への転属は、窓際の席に追いやって肩を叩くのと同じ意味だった。

立场上、俺はそれを事前に知らされていた。しかし新副社長とはいえ、俺にそれを止める権限などなかった。むしろ承認する立場にあった。

声をかけるなら今夜しかないだろうと考えた俺は、岩瀬を馴染みの飲み屋に誘った。三十年以上通い続けた、会社近くの裏路地にある「ちよ」という古くて狭い割烹居酒屋だ。

カウンターの一番奥の席で、俺は腹を割って自分の知る限りのことを正直に話した。俺は昇進して、お前はクビだ、と。俺たちは個人的には仲が良かったが、出世に関しては所属する派閥の違いが大きく、仕事上、敵対することも少なくなかった。

「いいよ、会社のためなら俺は辞めるよ」

岩瀬は枝豆をつまみながら言った。

「俺もわかってた。編集は駒が足りてるもんな。潮崎もいるし若い佐々木もいる。まあ機動力も今の人脈を考えても、いいもん作れるのはあいつらだろうよ。俺はちよつと高給取りになりすぎたな」

「お前は本当にそれでいいのか」

「よくない、と言ったって、地方にまわされて給料が減るだけだろ。俺は会社が好きだけど、会社が俺を好きじゃないならしょうがねえ。そのかわり副社長さんよ、退職金ははずんでくれや」

カウンターの向こうでは、店をひとりで切り盛りする千代ちゃん俺たちの話を聞いていた。

彼女と他愛のない話をしたり、からかって笑い合うのが楽しみで、若い頃、俺たちはよくふたりでこの店に通った。当時の彼女は店の看板娘だった。小柄で機敏で、かわいかった。

千代ちゃんは四十を過ぎた頃に、病気で田舎に引っ込んだママから店を譲り受け、それ以来ひとりで細々と営業を続けている。昔に比べてずいぶんふくよかになり、顔もしわが目立つようになったが、料理の腕前は前のママよりも達者で、常連客が毎晩通い詰める。

「俺さあ、千代ちゃんのこと、好きだったよ」

この店に通うのはこれが最後だから、という感じで、岩瀬は猪口を傾けながらしみじみと言った。

「俺もだよ」

どんな理由があるのは知らないが、千代ちゃんはずっと独身を通してきた。

「もう、そんなこと言って、ふたりともさっさと結婚しちゃったくせに。私、みんなここで聞いてんだからね。あんたたちが好きな女の子の話するのも、結婚の話するのも、子どもの写真を自慢し合うのも」

「あのね、男はね、何人もの女を同時に好きになれんの」

「そうそう、そういう生き物だから」

「ひどーい。でも、私も岩ちゃんのことけっこう好きだった」

「ほんとかよ」

岩瀬の弾けるような笑顔を見るのは久しぶりだった。

「おいおい、千代ちゃん、それ俺じゃないのか」

「川ちゃんはだめ。岩ちゃんクビにして自分だけ出世するなんてひどい人はね、私、嫌いな」

「きついなあ」

「ごめんね。今日は岩ちゃんの味方させて」

千代ちゃんは目をうるませてそう言くと、こみ上げるものを隠すように背を向け、奥に引っ込んでしまった。

「お前、誘ったら今夜いけんじゃねえのか」

「ばか、俺は浮気はしない主義なんだよ」

「そうだったな」

「それよりお前、ちゃんと社長になれよ」

「なんだよ」

「そんで、社長に登り詰めたら、また俺のこと再雇用してくれや。トイレ掃除でいいからよ。俺、会社好きなんだ」

「うん。わかってる」

「できるだけ早くだぞ」

「努力するよ」

でも、その約束は果たせなかった。

数年の後、俺は岩瀬の言う通り、社長になった。

というより、俺以外、他になり手がいなかった。先代社長が突然の脳梗塞で倒れたとき、手を挙げる者がひとりもいなかったため、押し出されるようにして社長に就任した。会社から敗戦処理のリリーフを任せただけだと、自分では思っている。

岩瀬はというと、その前の年に亡くなった。

会社にいたときから糖尿病で腎臓が悪かったのだが、仕事は普通にこなしていたし、量が減ったとはいえ相変わらず酒も飲んでいた。それほど深刻なものではないだろうと勝手に決めつけていたから、奥さんに連絡をもらったときは信じられなかった。

葬式が済んでからしばらくして、俺は改めて仏壇に手を合わせるために、ひとりで岩瀬の自宅を訪ねた。

亡くなった年に撮影したものだという遺影の顔は、俺の記憶にある岩瀬よりもずいぶん老け込んでいた。

「会社が生き甲斐だったのよね」

と奥さんは言った。会社を辞めてから、あの人、毎日何もすることがなくてぼうつとしていたのよね、と。腑抜けみたいだったの、と。

「この人が会社を辞めるとき、私、川さんにお礼の葉書を送ったのおぼえてる？ 辞めさせてくれてありがとう、って」

「うん、おぼえてるよ」

「これでストレスから解放されて、体調も少しは良くなるかな、って思ったのよね。お酒もタバコも仕事上必要だと言ってたけど、仕事がなければやめられるじゃない。そしたらゆつくり静養して、一緒に旅行したり、映画見に行ったりしたいなって。でも逆だったのよね。あの人、魂抜かれちゃった」

奥さんの言うとおおり、もしも会社を辞めていなければ、岩瀬は死ななかつたような気がする。毎日仕事に追われ、ストレスに晒され、会議で言い争い、傾く会社を必死で支えていれば、きっと今もまだ生きていた。酒を飲みタバコを吸い、身体をところんまですぐ追いつめて、でも、死ぬどころではなかつただろう。

俺が社長で、あいつが副社長だったかもしれない。俺たちは意見ぶつけ合い、お互いに血を流して戦いながらも、きつと派閥の壁をぶち壊し、風通しのよい会社をつくれただろう。そしてときどき、千代ちゃんの店に通って、仕事とは関係のない話で笑い合つただろう。

なのに、俺は自分の出世に目がくらんで、あいつを見捨てた。

シャツのボタンを外し、脂肪のつまった腹を手のひらでぼんぼんとたたく。足がむくんで気持ち悪いので、靴下も脱いだ。

もうタクシーを呼ぶ気力もないので、このまま応接セットで夜を明かすことにする。

蛍光灯を消すのも面倒くさい。さっさと寝てしまおう。岩瀬は思い出して感傷的になったところで、会社の業績が良くなるわけじゃない。そんな無駄な時間を過ごすくらいなら、一分でも長く睡眠をとって、頭のすつきりした状態で朝の会議を迎えたほうがいい。

しかし瞼を閉じると、あの夜、千代ちゃんの店で酒を飲み交わした岩瀬の顔が浮かび上がる。結局、俺はあいつに一度も謝ることができなかった。

すまん。俺はやつぱり社長の器じゃない。

そろそろ潮時だと思ってるよ。

でも本当は最後までお前と一緒に戦いたかった。

あきらめるなら、お前と一緒にあきらめたかった。

わかってくれ。

まどろみを破ったのは、メールの着信音だった。

ソファに横たわったまま、俺は腕を伸ばしてノートパソコンを引き寄せる。こんな時間までまだ残っている社員がいたのか。

マウスを動かし、スクリーンセーバーを解除して、メールソフトの受信トレイを見る。新着メールが一番上に太字で表示されている。無題。俺は目を見張った。

社内メールの差出人が、岩瀬の名だったからだ。

〈藤川社長 おつかれさまです。徹夜ですか、ご苦労なことです〉

〈約束は守ってもらわなきゃ困る。いつ俺を呼び戻してくれるんだよ。トイレ掃除までコスト削減しやがって。社員がみんな汚い便所で用足してたら、上がる売上も上がらねえよ〉

立ち上がってデスクの上の老眼鏡をかけ、ソファに戻ってもう一度よく読む。なんだこれは。誰のいたずらだ。

でも、それは確かに岩瀬の言葉だった。

〈俺が死んだのはお前のせいじゃない。しょうがないだろ、病気なんだから。もともと、ウチは早死の家系なんだよ。それに、会社辞めてからただぼうつと過ごしてたんじゃない。ずっと頭の中で考えてた。どうすれば会社がよくなるか。お前を助けてやるか。でも思いつかなかった。なにひとつ。俺もまた、結局はその程度の器なんだ。会社が俺を辞めさせたのは、正解なんだよ〉

へただ、会社をよくする最低限の条件はわかってる。ひとつは人材だ。優秀な社員がいること。もうひとつは、経営者だ。社長がしっかりすること。言うまでもねえ、当たり前の話だろ。わかってんのか。以上、よろしく。編集部 岩瀬

俺はそれを何度も読み返した。

気づくと、時計は午前三時になっている。

俺はひとまず岩瀬のメールのウィンドウを閉じて、人事部長の澤村が寄越したメールを開き、添付資料をプリントアウトした。

澤村のつくる資料は、いつも要点が整頓され、まとまっていて読みやすい。三歳下の彼もまた、会社のために三十年以上身を粉にしてきた仲間のひとりだ。

相手が大学生だからといって、みくびつてはいけない。もの考えることのできる若い子は、俺や澤村のようなロートルよりも、この会社の将来にとって、ずっとずっと価値がある。むしろ俺たちこそが謙虚でなければならぬ。必死でなければならぬ。そのことをわかってるから、俺は澤村に人事を任せた。その澤村が、会議の前に目を通せと資料を寄越した。

デスクに戻り、赤ペンを手に澤村の書いた文章を追う。気になる部分にチェックを入れ、学生の書いた課題論文を何度も読み返す。俺は夜を徹して、その作業に没頭した。

窓の薄青さに朝の訪れを感じて、ひとつ大きな息を吐き、ペンを置いた。作業を完了したのは午前六時だった。もうすぐ営業部長の笹岡が朝一で入社する頃だ。

最後に資料をとんとんと整え、質問事項を書き出した蛍光色の付箋をその一枚目に貼りつける。

ふと、岩瀬の顔が浮かび、俺はまたノートパソコンを引き寄せてメールソフトを立ち上げた。うっかり消してしまわぬように、

さつきのメールを保存しておこうと思ったのだ。

ところが、受信トレイのどこを探しても、岩瀬のメールが見つからない。ゴミ箱フォルダにもない。検索をかけても、出てこない。削除した覚えはないのだが。

夢でも見ていたのだろうか。

そうだよな、死んだやつがメールを寄越すなんてこと、ありえないよな。追いつめられて変な夢を見たのかもしれない。

俺は立ち上がって昨日のシャツを脱ぎ、だらしなく床にはいつくばるネクタイと靴下を拾い上げて、それらをロッカーに用意している洗濯物の紙袋にまとめて押し込んだ。

クリーニング済みの清潔なシャツに着替え、靴下も新しいものを履き、鏡の前でネクタイを締める。ジャケットに袖を通して深呼吸しながら姿勢を正す。

新しい一日がまたはじまる。

デスクに戻り、朝刊を読むかわりに、俺はネットのニュースサイトを開いてトピックスを追う。

毎日、世の中は動いている。俺も動き続けなければいけない。それをきつと、あいつが見ている。

もう少し、俺はこの椅子にしがみつুকことにする。



※この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とはいっさい関係ありません。  
※本作品に関するすべての権利は著者本人に帰属します。また、無断での複製・改変・放送・上演等は固くお断りいたします。